

国際協力特別賞

対等な世界

東京都立小石川中等教育学校 6年(高3)

山崎 真由

私の描く理想の世界は、平等な世界ではなく、対等な世界である。そもそも格差というのは、人間が定めた尺度の中の話でしかないはずで、そんな一面的な見方の中で、完全な平等などあり得ないはずだ。所得や産業の程度によって、先進国、発展途上国という国の位置づけを行う今の世の中。そんな構造に、私達は無意識に優劣の意味を感じてしまっているように思える。しかしそのような格差は、本来ただの「差」でしかないのではないだろうか。それを理解した上で、相手を敬って対等な関係を構築できる世界が、今必要なのではないか。

私は昨年の夏、ボランティア活動に参加するために西アフリカのガーナを訪れた。そこで直面した現地の実情は、やはり日本で聞くような途上国のそれだった。不自由なインフラ環境、暗く狭い部屋の中で芯の折れた色鉛筆を取り合う保育園の子どもたち、肉や野菜が滅多に出ないホームステイ先の質素な食事。日本で何不自由なく暮らしてきた私には衝撃的なことばかりだった。開発の余地があるという意味で、確かにガーナは発展途上国なのだろう。しかし現地の人々がそんな社会を嘆き、暗い表情で生活する様子など、私は目にしなかった。ホームステイ中、バケツ一杯の水で全身を洗うことに苦戦していた私は、「やっぱり流れるシャワーの水を浴びたいんじゃない？」と現地の人に尋ねたことがある。そのとき彼は、「全然問題ない！慣れているからね。」と明るい笑顔で答えた。きっと私達が勝手に作り出す格差なんて、そんなものなのだ。日本人は湯船につかり、ガーナではバケツの水で体を流す。所詮、ただの差なのだ。

問題なのは、そんな差によって国の間に上下関係が生まれる状況ではないか。インフラを整備して「あげる」意識、技術を伝える国の、自国がより優れているという意識、産業の未熟な国に対する、劣っているという見方。それが問題なのではないか。私はあの2週間自分なりに彼らと対等に生活してきた。彼らの歴史に興味を持ってそれを敬い、私は日本の文化を紹介する。使う言語が違えども、同じ話題で大笑いする。現地の小学生と会話したとき、私たちは紛れもなく友人だった。もちろん世界には、より進んだ教育や医療を必要とする国がある。想像もできないほど過酷な生活を強いられる人々もいるだろう。しかしそこで、「助けてあげる」という意識の支援が行われるようでは、「持続可能な開発」は不可能だと思うのだ。「あげる、もらう」の感覚は、支援後も残る上下関係を生み出してしまおうと思うからだ。そうではなくて、その国固有の文化や生活を敬った上で、より良い国

を作るために他国が手助けをし、結果として様々な国が各々の得意分野を得て、協力しながら世界の問題に取り組んでいく。こういったあり方が理想的ではないだろうか。昨年掲げられた SDGs も、その中で達成されていくのではないだろうか。

これは個人にも言えるはずだ。何か行動を起こそうとして、「こんなことで平等な世界は作れない」「たった一人何かしたって、途上国が助かる訳じゃない」このような考えより、「この募金で、世界の誰かが笑顔になればいいな」くらいの心持が良いと思うのだ。私がガーナの友達を思い浮かべる時に、くだらない上下関係を見ないように、あの時本や文房具をプレゼントした子ども達に、自己満足よりも彼らの将来への期待を抱くように、人は個人の間では、いつだって対等なのだ。その間に横たわるのは、格差ではなく差でしかないのだ。

いくら私の想像する国際関係の実現が困難でも、個人のこのような意識がその端緒となることを、私は信じている。そしてそんな関係がこの世界をより良くし、国境を超えた本物の友情がたくさん築かれる場となることを、強く願っている。